



巻 頭 言

農 薬 技 術 へ の 期 待 と 課 題

三井東圧化学 精密化学品事業部長 山口富士生

今年は桜の開花が平年より約三週間も早く訪れ、桜まつりの急繰繰り上げなど桜の名所ではちょっとしたパニックがあったようだ。気象の異変と比べるつもりは毛頭ないが、世界の政治・経済にまさに激変と云うべき事態が続発している。ソ連のペレストロイカに源流を発した改革の流は東欧の変革を呼び、さらにはソ連自身大統領制への移行と進み、とどまるどころを知らぬかの如きである。そのスピードは驚くばかりである。最近はこのスピードについていけず、評論家諸氏の中には週刊誌の執筆依頼を断った方もあるという。

為替レートや株価の動きも目まぐるしいばかりである。1ドル100円台も近いのではとささやかれて久しくないのに、目下のところ150円～160円。金利高と相俟って景気減速への影響が心配され始めている。90年代は21世紀に向けて変革の時代と云われているが、多くの課題が提起されているようである。

農業分野についても、ここ数年来内外からの農業バッシングに揺れ続けているが、これらの問題については多くの人々が分析し、さまざまな角度から対応策が提言されている。農薬業界も同様で、90年代は新たな方向への胎動と位置付けられよう。植調協会が提言している10項目のテーマもこの流れの一環であり、昨年25周年を迎えられ新たな飛躍を旨とすると思われる。

25周年といえば、弊社のMO粒剤も昨年25周年を迎え、その歴史に対して深い感慨がある。MOの歴史も決して平坦ではなく、その時代に

うまく合せながら植調協会を始めとする各先生方、メーカーの方々に多大なる尽力をいただき現在まで至った。この経過については弊社の発行したMO25周年記念誌に詳しい。この歴史と体験が今後この変革の時代に大いに活されるはずで、弊社としても21世紀に向けてバイオテクノロジーの応用等、具体的な技術の追求と蓄積に努めている。その一例としては、

- 1) 高効率水稻生産技術（ハイブリットライス等）
- 2) 雑草、病虫害の生態を利用した防除技術（バイオ農薬等）
- 3) 種々の特質を導入した新作物品種の作成技術（耐病虫性作物品等）

などがある。

農業には未だ残された課題が新旧含め多々ある。特に最近、声高に叫ばれている地球環境の劣化という問題が有り、化学農薬等もその一要因との嫌疑がかけられている。一方全地球規模で考慮した場合、人口増加による食糧不足は継続しており、食糧増産は必然である。今後、農薬を始めとする農業技術にかけられる期待は大きい。しかし食糧増産自体に地球環境のバランスを乱す要因が恐らく含まれているはずで、この一見矛盾する問題にどの様に対処し、調和を見出すかが今後の21世紀に向けての一大命題と思われる。

弊社にとっても今後の最大課題は、この“調和”であり、その実現に向けて今後微力ながら努力してまいりたいと考える。